「完成された未完」コンセプトに新オフィス創造

CARTA HOLDINGSオフィス

2社統合後、虎ノ門ヒルズステーションタワーに移転

インターネット広告事業等を運営する、サイバー・コミュニケーションズとVOYAGE GROUPは2019年1月、経営統合した。統合以降も東銀座と渋谷のそれぞれのオフィスで業務遂行していたが2023年12月、組織として同じオフィスでの業務展開、運用を開始した。新オフィスは虎ノ門ヒルズステーションタワー36階～38階のフロア。1フロア面積は1000坪、3フロアで3000坪になる。2つの旧オフィス拠点の合計面積とほぼ同じ面積だ。同オフィスに勤務する社員数は約1500人、出社率は約50%。

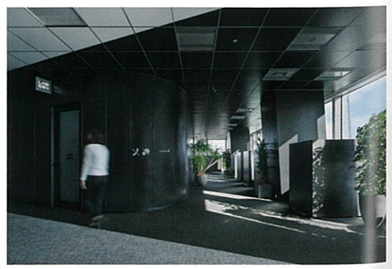
2社の拠点統一は経営融合の総仕上げ。社名のCARTAのいわれは次の通り。CARTAとはラテン語の「紙」、それが転じて「海図」。また、イングランド民主主義の礎となった「マグナ・カルタ（大憲章）」に由来している。「従来からある常識に捉われず、自らが新たな航路を切り拓き、新しい海図を描いていく」という意味が込もっている。

オフィス移転の検討は2020年頃から開始、移転プロジェクトメンバーは当初8人でスタートした。状況に応じてメンバーは増加していった。新オフィス創造のコンセプトは「完成された未完」。オフィスデザイン設計は㈱船場が手掛けた。船場はCARTA HOLDINGS（以下、CARTA HD）のミッション「The Evolution Factory」を体現する「進化推進空間」を創造した。

今回、㈱CARTA HDグループコミュニケーション本部副本部長・大橋徹氏、㈱船場EAST事業本部Design Direction Division 1 チーフデザイナー・岡田拓大氏、㈱船場EAST事業本部総合設計Division 3デザイナー・関口裕太氏の3氏にお話をうかがった。

●

新オフィス創造のコンセプト「完成された未完」の意味をCARTA HD・大橋氏は説明した。「2社が統合し『The Evolution Factory』という進化推進をグループミッションとして掲げることになった。オフィス移転するからには進化を感じられる、変化を起こしていけるような自由空間、仕事につながるようなイメージのオフィスにしたかった」。



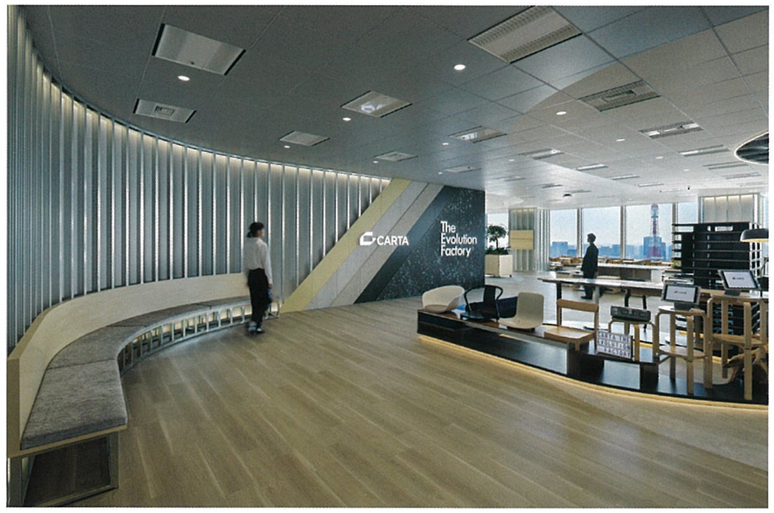
CARTA HDと船場とのオフィス創造における交流は永く、今回のオフィス移転に際しても、どのようなオフィスを創造すべきか等の議論を重ねてきた。今回、新オフィスのエントランスに『完成された未完』を具現化、表現している。壁を構成する骨組みや下地、仕上げを5段階にわたり意匠的に見せることで、進化の過程を表現した。順を追って壁ができていく過程が一目で理解できるようにデザインしている。CARTA HDのミッションを発信するシンボル的なエントランスを創造した。会議室等の壁面は装飾を施さず、壁の下地となる機能素材をそのまま仕上げとして使用することで、進化の余白を残した。

棚を設置する際に高さを自由に変更可能にする、通称ガチャ柱を数多く採用。穴を自在に利用しさまざまなアタッチメントを取り付けることを目的に使用している。機能的な意味での進化を促している。

船場は既存オフィスの家具や建材等の素材を単に廃棄処分するのではなく、できるだけ有効利用・リサイクルできないかと考える企業。素材を粉砕して改めて固めて新素材にしてアップサイクルする例も多々ある。CARTA HDの新オフィスでも、船場の利活用の考え方を十分に採用している。CARTA HDのエントランスには、経営統合した2社の家具を裁断して組み合わせ、新しいテーブル等の家具に造作し、2社の融合を家具で表現した。

船場・岡田氏は「移転前の使われなくなった家具に新たな要素を加え、新しい機能を持った家具にするなど、各所工夫している。ただ使わなくなった家具を廃棄するのではなく、今回のオフィスで必要としている家具へのアップサイクルを行った。機能を充足することはもちろん、CARTA HDさんの社内・社外の方へ、進化を感じることができる空間になるようデザインした」と語る。

船場・関口氏は「当社は家具や素材を簡単に廃棄するのではなく、利活

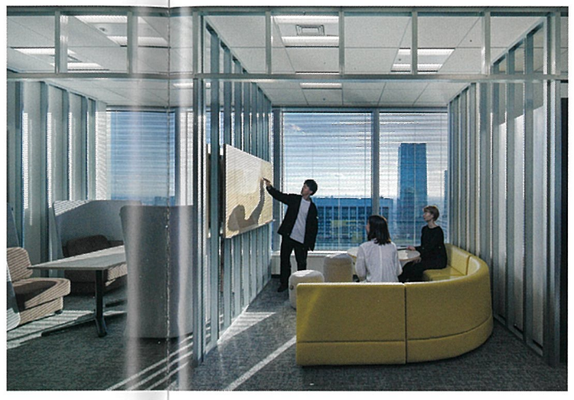


写真提供：
©Masato Kawano/Nacasa＆Partners Inc.

用・有効利用を促させてもらっている。CARTA HDさんには理解を得て利活用を遂行することができた。旧オフィスで使用していたものをアップサイクルし使用することで、旧オフィスでの思いや記憶を新オフィスに紡ぐことができる。また環境問題としても有効なことと考えている。これからもこの考え方に賛同いただけるならば、他企業においてもCARTA HDさん同様に積極的な取り組みを心掛けていきたい」という。

同氏はまた「『完成された未完』を考えると、変化させることができそうと思えるような余白を創っていくことが大事。作り込みすぎると変えようと思った時、変えられなくなる。最も変えやすいのは白い壁だがそれだけでは進化は起こらない。きっかけとなる仕掛けを作り込むことで進化を促すことができる。何もしないのではなく、適度な作り込みと余白をあえて作ることで、進化が起こりそうな未完の状態が完成される」という。

新オフィスの働き方はABW、フリーアドレスを展開している。大橋氏は「新オフィスの90%はフリーアドレスだが、20社ほどの会社が集まるオフィスなので、ある程度のエリアを決めないと同じ会社の同僚、チームメンバーがどこにいるか、わからなくなってしまう」と語る。



《オフィス概要》

○エントランス（36階）　前述のように壁を構成する骨組みを段階的に、進化する過程を表現。同社のロゴマークを掲示、ミッション「The Evolution Factory」が掲げられている。

○AJITO－社内BAR－（36階）　渋谷オフィスで社員の憩いの場となっていた「AJITO」は、ライブラリー「OASIS」と融合。その空間デザインを一新して新オフィスに復活した。円形の外観は巨大な本棚、社員が持ち寄った本がぎっしり収納されている。内側は社内BAR、ステージが設置され、各種楽器が設置されている。折に触れ同好者たちは演奏を楽しんでいる。

○PLAZA－多目的エリア－（36階）　フリースペース「PLAZA」には、シンプルな木材を組み合わせたイスやベンチ、テーブルが設置されている。利用シーンに合わせてテーブルやイスを並べ替えることで自在なレイアウトができる。社員や訪問客がオープンに交流できる憩いの場所。イベント開催も可能。

○LAB－会議室－（36階、37階、38階）　36階は主に来客用、執務エリアの37階、38階は社内ミーティングで利用される会議室。壁を構成するために最低限必要になるLGS（軽量鉄骨）組みだけで仕切られている。

○各所の壁面にはスリットを設けて、タッチダウンカウンターや掲示板、本やワークツールを置く棚を設置している。必要なものを好きな場所に設置することができる造作をした。通路やわずかであってもスペースを利用して気軽に同僚たちと気軽に交流や発信を行うことができる。新たなつながりや共創が生まれるオフィスを創造した。

移転して約4カ月が経過した。社員皆さんの声はどうなのだろうか。大橋氏は「虎ノ門ヒルズステーションタワー36階～38階のフロアから見る景色がいいというのが一番の声。次にお洒落という。大きな不満は出ていない。個人的にはビジュアル上のお洒落さよりも、デザインロジックを追求したからお洒落と評価されたことはうれしい。デザイン設計して頂いた船場さんには感謝している」と語る。

これからどのようなオフィス創りを目指そうとしていのだろうか。大橋氏は「オフィスが最先端になったから会社にくるとか、お洒落だから会社が好きというのは一過性だと思う。よりよい状態になることが社員全員で実現できてこそ、オフィスへの愛着が湧いてくると思っている。オフィスへの愛着が会社への愛着になり、会社にきた方が生産性は上がり、いい仕事ができると感じるようになる。そうなったら、会社自体を進化させていける。並行してオフィスはさらにいいオフィスになっていく。現状に満足することなく、オフィスは常に進化させていきたい」と語る。